

## 《醒世姻縁傳》 解題

植 田 均

1. 《醒世姻縁傳》の成書年代、作者
2. 《醒世姻縁傳》のあらすじ
3. 《醒世姻縁傳》のテーマ
4. 《醒世姻縁傳》主要登場人物
5. 《醒世姻縁傳》主要影印本・排印本
6. 《醒世姻縁傳》関係参考資料
7. 《醒世姻縁傳》言語特点

### 1. 《醒世姻縁傳》の成書年代、作者

《醒世姻縁傳》の成書年代は、胡適「《醒世姻縁傳》考証」により明末清初とされるのが一般的である。<sup>1)</sup>《醒世姻縁傳》の作者は西周生の筆名を用いる。その使用する基礎方言から山東省の人間であることは判明している。しかし、それ以上のことは不詳である。<sup>2)</sup>

### 2. 《醒世姻縁傳》のあらすじ

前世と今世とに渡る「因縁因果」を描く。前世では、晁源（晁大舎）という男が監生を金銭で買い、更に芝居芸者・娼妓施珍哥を妾として家へ迎え入れようとする。晁源の父親晁思孝は華亭県や通州などの知県を歴任していた。父親は晁夫人（鄭氏）とともに一人息子晁源を溺愛していたため、盲目的になる。

ある日、晁源は、仲間とともに狩猟に出かけた折り、一匹の仙狐を弓矢で射殺し、その皮を剥ぐ。やりたい放題の晁源は施珍哥を妾として家へ迎え入れ寵愛した結果、正妻の計氏と気まずくなる。そこで、晁源は罾を設け、ついに計氏と離縁する。罾にはめられ、憤慨した計氏は首吊り自殺をする。これでは、晁源みずからが殺害したのも同然である。また、世話になった胡旦、梁生を追い出し、彼らの財貨をもくすねる。種々の悪業を重ねた結果、晁源は唐氏（小鴉児の妻）との浮気現場を小鴉児に押さえられ、殺害される。晁源の母親晁夫人は、若い一人息子を失い嘆くが、これも因果応報だと確信し、いよいよ罹災民救済などの善行を積む。

晁源（晁大舎）の前世はこれで終わり、来世に於いては、晁源は狄希陳として転生する。皮を剥がれた、かの仙狐は狄希陳の正妻薛素姐に転生した。狄希陳（前世の晁源）に対して皮を剥がれた怨念を晴らすため、仙狐が取った最適の手段は「晁源を来世まで追いかけて行って [正妻になる] こと」であった。正妻に取まれば、昼夜構わず虐待、凶暴はやりたい放題できるからである。

狄希陳は正妻素姐の残虐ぶりから逃れるため、外地へ単身赴任する。その折り、計氏も(復讐のため)童寄姐に転生し狄希陳の妾になる。童寄姐は事実上の「正妻」で、素姐とやりあっても負けていない。一方、前世が芝居芸者・娼妓であり、晁源の妾であった施珍哥は、今世では狄希陳が家へ入れた女中の小珍珠になっている。小珍珠は童寄姐から虐められ、ついには自害してしまう。

晁夫人の方は多くの功德を積んでゆく。難渋していた胡旦、梁生も晁夫人に救済されたのであるが、梁生が晁夫人に対して「恩返しをしたい」と晁梁(小和尚)として晁家に転生してくるのである。晁夫人の夫晁思孝の妾である沈春鶯が生んだ子として。一人息子晁源を殺害され、「跡取り無し」と嘆いていた晁夫人にとっては大いに喜ばしいことであった。

そして、悪業がついに満ちた薛素姐は急死する。高僧胡無翳(出家前の胡旦)が前世から今世への因果応報論を説き、狄希陳は「前世の悪業」を悟るのである。

### 3. 《醒世姻縁傳》のテーマ

この小説のテーマは以下の2点である。1つは、「人間は亡くなるとそれで終わりではなく、必ず生まれ変わる」という点。しかも「因果応報」が必ず行われるという。これが2つめの点。

「生まれ変わり」は1度だけではなく、果てしなく繰り返される。これを車輪の回転に見立て「輪廻転生」と称した。これは、古代インドのみならず、タイ、ブータン、ネパール、スリランカなど、ほぼ東洋全体の思想であった。輪廻転生思想は、仏教を即座に想起するが、今から約2500年前に誕生したゴータマ・シッダルタ(後の釈迦)以前に既に一つの思想として存在していた。例えば、古代インドのパラモン教には「輪廻転生」が教義の中心に置かれている。<sup>3)</sup>

《醒世姻縁傳》において「輪廻転生」がセリフとして描かれている場面。

次の例は、相于廷が狄希陳に対してのセリフ。「早く死んで新しい人生をやり直す」という。輪廻転生を確信し、しかも、これを「前向き」に捉えている。

你可說怕死。這下地獄似的，早死了早托生不俐亮麼。(58.6 b.5)<sup>4)</sup>

(「……兄さんは死ぬのが怖いのかね?こんな地獄のような毎日ならば、早めに死んで早めに転生した方がよほどすっきりするんじゃないかい!」)

素姐が狄希陳を部屋の外へ追い出し、狄夫人が何を言っても相手にしなかった。薛夫人はこの点を知り、叱った。素姐本人は「前世」の顛末を知らないから「なぜだか分からないのだが、腹が立つ」ことを次のように告白している。

我不知怎麼見了他，我那心裏的氣，不知從那裏來，恨不的一口喫了他的火勢。(45.8a.6)

(「なぜだか分からないのだけれども、あいつを見ると腹が立って、どうしてかしら、

一口に呑み込んでしまいたいような気になるのよ！)』

素姐は、相于廷の細君に対して<「前世からの仇」のように夫へ立腹する理由>を次のセリフで示す。即ち、不可解な点を前世に求めているのである。

我也極知道公婆是該孝順的，丈夫是該愛敬的。但我不知怎樣一見了，他不由自己就像不是我一般一似。他們就合我有世仇一般。恨不的不與他們俱生的虎勢。(59.7b.4)  
(「……私だって、義父母に対しては孝行、夫には敬愛をよくよく知っているわ。ただ、どうしてだか、1度、奴の顔を見ると、もう、自分じゃなくなっちゃうみたい。前世からの仇でもあるみたいに、どうしても生かしてはおけない、なんて気持ちになるの。)」

薛素姐が(個人ではなく)家系として「前世の怨恨」に触れている。したがって、狄希陳の家族全員に対して怨恨を抱いているセリフ。

我想起必定前世裏與他家有甚冤仇，所以神差鬼使也由不得我自己。(59.7b.7)  
(「きっと前世で、奴の家から何か無実の罪を負わされた恨みがあって、それで仇敵になったのじゃないかと思うのよ。ともかくこの世でない何かが作用して、私にもどうにもならないの。)」

家の使用人狄周の妻が、薛素姐に対してたしなめているセリフ。立腹に対する原因が何も分からない場合、その原因理由を前世に求めると解決ができるのである。このような考え方は、下女にも浸透していることを示す。

他合你有那輩子冤仇。下意的這們咒他。你也不怕虛空過往神靈聽見麼。(75.2b.9)  
(「旦那様に前世からの恨みでもあって、わざとそんなに呪ったりなさるんですか？ その空中を通る神霊にそんなことを聞かれて恐ろしくないのですか?!)」

童寄姐も小珍珠に対する立腹理由を「前世の因縁」だと告白しているセリフが次の通り。

我想來必定前世裏合他有甚麼仇隙。(80.2a.1)

(きっと前の世で、あの子と何か仇を結んだのに違いないのよ。)

この小説の主題は、以上のように輪廻転生、因縁因果の法則に基づいている。しかし、この法則からの「脱却」までは言及していない。

#### 4.《醒世姻縁傳》の主要登場人物

《醒世姻縁傳》の主要登場人物を晁源関係と狄希陳関係とに分けて挙げる。<sup>5)</sup>

##### 晁源関係

- 晁源 監生の資格を金銭で買う。文中では晁大舎としてよく出てくる。狄希陳に転生。
- 晁思孝 晁源の父親。華亭県知県、通州知県などの職を歴任。後、女中の沈春鶯を妾とする。
- 晁夫人 晁源の母親。晁思孝の正妻。鄭氏とも称する。温厚で、徳の高い女性。
- 計氏 晁の正妻。のち、晁源より離縁される。死去ののち、童寄姐に転生する。
- 施珍哥 芝居芸者・娼妓。のち晁源の妾となる。死去ののち、小珍珠（童寄姐の下女）に転生する。
- 沈春鶯 晁思孝の妾。晁梁の生母。
- 胡無翳 通州香岩寺の住職。高僧。俗名：胡君寵、胡旦。
- 梁片云 通州香岩寺の僧侶。俗名：梁安期、梁生。後世は晁梁に転生。晁夫人に対して孝行する。
- 晁梁 晁源の＜妾腹の＞弟。幼名“小和尚”。晁夫人を慕う。
- 晁思才 晁思孝の一族の弟。性格は良くない。
- 晁無晏 晁思孝の一族の孫。
- 禹明吾 書記。晁源の隣家で、友人。
- 小鴉児 皮革職人。曲がったことが大嫌いな性格。晁源と自分の妻（唐氏）の浮気を知り、二人を殺害する。
- 唐氏 小鴉児の妻。晁源に気に入られ、深間にはまった結果、夫の小鴉児に殺害される。
- 張瑞風 武城県監獄役人。晁源亡き後、珍哥を妾とする。
- 計都 計氏の父親。
- 海会 道教の尼僧。俗名青梅。
- 呉学顔 晁家雍山荘の執事。
- 晁住、晁鳳、晁書、晁鸞、李成名 晁家の使用人。

##### 狄希陳関係

- 狄希陳 秀才。晁源からの転生。前世の怨恨を背負って生きて行かねばならない運命。
- 狄宇羽 狄希陳の父親。号は賓梁。温厚な常識人。
- 狄夫人 狄希陳の母親。狄賓梁の妻。相氏。素姐によって気死させられる。
- 薛素姐 狄希陳の正妻。晁源に射殺された仙狐からの転生。狄希陳を虐待する。絶世の美人であったが、後、目と鼻をサルに抉られる。
- 童寄姐 狄希陳の妾。計氏からの転生。素姐とやりあっても負けない。
- 童七 童有聞とも称す。銀細工店の支配人。童寄姐の父親。

- 童奶奶 童寄姐の母親。駱氏とも称す。機転が利く常識人。
- 虎哥 童寄姐の弟。
- 駱校尉 童寄姐のおじ。常識人。
- 狄巧姐 狄希陳の妹。常識人。
- 狄希青 狄希陳の妾腹の弟。幼名は小翅膀。
- 調羹 劉姐。狄宇羽の妾。狄希青の生母。気性は善良の常識人。
- 相棟宇 狄希陳の叔父。
- 相妗子 狄希陳の叔母。
- 相于廷 狄希陳の表弟（いとこ）。進士。後、「相主事」として登場。
- 薛教授 薛振とも称す。字は起之。秀才。薛素姐の父親。常識人。素姐により気死させられる。
- 薛夫人 薛振の正妻。常識人。
- 薛如卞 薛素姐の一番上の弟。秀才。幼名は春哥。常識人。
- 薛如兼 薛素姐の二番めの弟。秀才。幼名は冬哥。常識人。
- 薛再冬 薛素姐の一番下の弟。常識人。
- 龍氏 薛振の妾。薛素姐とその弟たちの生母。非常識人。
- 程樂宇 狄希陳たちの私塾教師。
- 孫蘭姬 狄希陳の恋人であるが、狄希陳とはほどなく別れる。娼妓。唐氏からの転生。
- 小珍珠 童寄姐の女中。施珍哥からの転生。
- 吳推官 成都刑庁の役人。狄希陳と同じく恐妻家。
- 智姐 狄希陳の同級生である張茂実の妻。
- 尤聡 狄家の料理人。悪事を重ね、落雷に遭い死ぬ。
- 呂祥 狄家の料理人。
- 薛三槐、薛三省、小濃袋 薛家の使用人。
- 狄周、小選子、張朴茂、伊留雷 狄家の使用人。

## 5. 《醒世姻縁傳》の主要影印本・排印本

《醒世姻縁傳》の主要影印本・排印本を挙げる。影印本は次の(1)・(2)、排印本は以下の(3)～(7)。日本語訳は21世紀になってから漸く刊行された。

- (1) 《醒世姻縁傳》(線装二函全二十冊), 人民文学出版社影印本(1988年第1版, 1994年第2次印刷)。(首都図書館蔵同徳堂本を底本。原本残破頁は人民文学出版社蔵同治庚午覆刻本により補う)
- (2) 《醒世姻縁傳》(全5冊), 袁世碩前言。古本小説集成編輯委員会編, 上海古籍出版社, 1994年11月。(首都図書館蔵同徳堂本を底本)

- (3) 《醒世姻縁傳》[清] 葛受之批評，翟冰校点。齐鲁書社（上、下），1994年刊。（首都図書館蔵同徳堂本を底本）
- (4) 《醒世姻縁傳》（足本）齐鲁書社，1993年刊。（首都図書館蔵同徳堂本を底本）（弁語、凡例、引起、本文、校点後記）
- (5) 《醒世姻縁傳》黄肅秋校注，上海古籍出版社（上、中、下），1981年刊。（亜東図書館排印本を底本）（引起、本文、付録一（徐志摩）、付録二（胡適）、付録三、付録四、付録五、付録六、付録七、付録八、付録九、付録十（汪乃剛）
- (6) 《醒世姻縁傳》華夏出版社，1995年刊。（亜東図書館排印本を底本）（①注釈を付し、様々な文化水準の読者に適応。②「人物表」を付す）
- (7) 《醒世姻縁傳》吉林文史出版社，1998年刊。（亜東図書館排印本を底本）（序・徐志摩、引起、本文、付録一、付録二、付録三、付録四、付録五、付録六、付録七、付録八）

[訳書]

『醒世姻縁傳』訳書（訳者：左並旗男、出版社：兄弟舎<株式会社トスコ 書籍部>、出版年月日：2002年4月4日

## 6. 《醒世姻縁傳》研究

胡適は、1931年に「《醒世姻縁傳》考証」を発表。《醒世姻縁傳》と《聊齋志異》及び蒲松齡のその他の作品の内容を比較対照。且つ、語彙用法の類似性も検証。その結果、「《醒世姻縁傳》の作者西周生とは蒲松齡である」との見解を出す。しかし、現在に至るも、なお決定的な結論は出ていない。徐復嶺1993「《醒世姻縁傳》作者和语言考论」は言語面からの言及が多く、参考価値がある。楊春宇2003「《醒世姻縁傳》研究序説」は多くの刊刻本、影印本を解説し、巻末に多くの参考文献を挙げる。李焱2006「《醒世姻縁傳》及明清句法结构历时演变的定量研究」は、最近出た《醒世姻縁傳》の語法書である。

## 7. 《醒世姻縁傳》言語特点

これは、①「文字表記上の混乱」、②「方言語彙の夥しい混入」の2点に集約される。これらは、作者の口頭語の反映であろうが、当時すでに定型化されていた白話の手法を避け、口頭語に極めて忠実に書こうとしたため、用字上の混乱、方言の混入が甚だしくなっているからである。しかし、《醒世姻縁傳》の言語上の大枠は当時の北方方言で書かれ、そのうち山東方言語彙が夥しく混入している。以下、言語特点として「文字表記上の混乱」、「方言語彙の夥しい混入」について具体的に例を挙げる。

### 7.1. 「文字表記上の混乱」

これは、「同音仮借語」が多いことである。ただし、「照」、「由」、「檢」などは、「同音

「假借語」とは言っても、皇帝の諱を避けるために別字に換えているのである。《醒世姻緣傳》ではそういう箇所が多い。その例。炤管（照管）、不繇的（不由的）、簡點（檢點）、簡搜（檢搜）

「文字表記上の混乱」は、諱以外に「同音假借語」が極めて多く出現している点にある。今、《醒世姻緣傳》で使用されている同音假借語を挙げる。カッコの中は規範的な或いは通語としての表記形態である。声調が異なっても、軽声になれば同音になる。

<1> 同音假借で、偏や旁のみ異なる場合

挨哼・捱哼・噍哼（唉哼）、挨沫（挨抹）、跋地（拔地）、把把（卮卮・巴巴）、梆梆・幫幫（邦邦）、擗聲（邦聲）、棒椎（棒槌）、背搭（背裕）、韃馬（備馬）、不采（不睬）、不成才（不成材）、采打（睬打）、炒架（吵架）、倏保・睺睬（瞅睬）、雌搭・雌答（吡打・刺打）、搭連（裕褌）、挽餞（擋餞）、瞪眼（瞪眼）、動憚（動彈）、段子（緞子）、多嗜（多咱）、阿屎（屙屎）、耳躲・耳聒（耳朵）、跲（跌）、番（翻）、番身（翻身）、番轉（翻轉）、幡（幡）、風（瘋）、風狂（瘋狂）、風子（瘋子）、撒酒風（撒酒瘋）、哥阿（哥呵）、疙搭（疙瘩）、谷谷農農・咕咕噥噥（咕噥）、骨農・噯噥（咕噥）、拐的跌了（拐的跌了）、光采（光彩）、狠（很）、荒張（慌張）、糲稠（糲稠）、蹶嘴（掇嘴）、刺叭（喇叭）、纍命（累命）、羅皂・羅吨（囉吨）、沒堤防（沒提防）、迷胡（迷糊）、那（哪）、那個（哪個）、那裏（哪裏）、那怕（哪怕）、捻（擻）、盤膝（盤膝）、賠嫁（陪嫁）、陪禮（賠禮）、碰頭撒潑（碰頭撒潑）、旗扁（旗匾）、僉押（簽押）、清辰（清晨）、焮黑（黧黑・漆黑）、取妾（娶妾）、狀（然）、頰子（嚙子）、稍信（捎信）、素子（嗑子）、算記（算計）、縮搭（縮搭）、倘下（躺下）、掏換（淘換）、苕帚（笤帚）、桶（捅）、推頰（推搡）、揼拉骨（歪拉骨）、碗櫟（碗碟）、文銀（紋銀）、見（現）、見成（現成）、見今（現今）、見任（現任）、見在（現在）、搖地裏（遙地裏）、一留風（一溜風）、伊吾（啣唔）、硬幫・硬梆（硬棒）、豫備（預備）、豫先（預先）、員領（圓領）、早辰（早晨）、爍過（炸過）、獐徨・章徨（張皇）、胗脈（診脈）

<2> 同音假借で偏や旁のみならず、字形が完全に異なる場合

倍（背）、背弓（背工）、背淨（背靜）、扁・眨（?）、不醒（不省）、倉卒（倉促・倉猝）、嘗是（常是）、扯羅（扯落）、椎打（捶打）、淳良（純良）、刺惱・刺鬧（刺撓）、粗辣（粗拉）、打迭（打疊）、打呼盧（打呼嚕）、打帳（打仗）、歹住（逮住）、耽待（擔待）、滴溜（提溜・提溜）、點鬧（點札）、吊（掉）、丁住（定住）、吊謊・調謊（掉謊）、吊魂（掉魂）、調嘴（掉嘴）、敦・墩（蹲）、多俗・多嗜（多咱）、跲腳（跌腳）、敢仔（敢白）、趕（擻）、骨農・谷農・咕噥（咕噥）、骨拾（骨殖）、括辣・刮拉（呱啦）、憨憨（酣酣）、杭貨（行貨）、噯喪（號喪）、呵（喝）、合（和）、痕記（痕跡）、鶻突・糊突（糊塗・胡塗）、虎辣八（虎拉巴）、畫（話）、懷揣（懷摯）、還惺・還性・還省（還醒・緩醒）、慌獐（慌張）、誨（熿）、渾身（渾深＝反正；橫豎）、渾帳（混帳）、極得・極的（急得）、疾忙・即忙（急忙）、計（記＝記憶）、計（繫）、簡點（檢點）、簡搜（檢搜）、藉口（借口）、靠（鏹）、科樹（棵樹）、嘿瓜子（嗑瓜子・磕瓜子）、懇鼻子（啃鼻子）、枯克・枯刻（酷刻）、薊（擻）、窠窠・窠抗（榔糠）、老瓜（老鵝）、老咎晚（老咱晚）、

利巴・戾把（力巴）、臉彈（臉蛋）、菘豆（綠豆）、沒試（沒事）、眯風・眯縫（眯縫）、面斤・面筋・面筋（面筋）、乜謝・乜屑・乜躉（乜斜）、明甫（明府）、那咎（那咱）、攏噪・攏額・攏喪（饜噪）、捻（攏）、鋪搭（撲答）、鋪膝（鋪騰）、輕醒（清醒）、殺（煞＝勒緊、扣緊）、煞時（霎時）、商确（商榷）、韶道・勺刀（勺叨）、收園結果（收緣結果）、搜簡（搜檢）、罈・罈・坛・壇、叨火（掏火）、跳搭（跳躉）、脫生（托生）、托拉（拖拉）、掙拉（歪辣・歪拉）、窩別（窩憋）、伍旋（舞旋）、躡（屣）、嘎飯（下飯）、唬虎（唬唬・嚇唬）、熏餞（熏嗆）、央己（央及）、佯長（揚長）、拽（掖）、一付……（一副……）、一籊轆・一砮碌（一骨碌）、原何（緣何）、獐徨（張皇）、撰（賺）、妝裹（裝裹）、綴（墜＝跟隨）

<3> 声調が異なる場合

閣字舊讀 gē 和 gé, 現在統讀為 gé。

白當（百當）、逼（避）、赤赤哈哈（嗤嗤哈哈＝因受凍而發出的聲音）、促恰・促掐（促狹）、打到（達到）、歹（帶）、抵搭（低搭）、抖搜（抖擻）、都都抹抹・都都磨磨（都都摸摸）、閣（擱）、掛拉・刮拉（刮刺）、家長（駕長）、攪用（嚼用）、擲撒（決撒）、棱棱掙掙・楞楞睜睜（愣愣怔怔・稜稜睜睜）、陸（擻）、乜乜屑屑・乜乜泄泄（乜乜斜斜）、食面（世面）、事（食＝日食、月食的食字）、事件（什件）、梳櫛（梳攏）、觸秫・蜀秫（秫秫）、淘（掏）、搥（腆・颯）、展污（沾污）

<4> 声母が異なる場合

雌牙咧嘴（齜牙咧嘴）、雌嘴（齜嘴）、村村的（蠢蠢的）、捍・扞（擗）、割磣（柯磣）、沒精塌彩（沒精打采）、門枕（門框）、侵在冷水（浸在冷水）、水缸（水缸）

<5> 韻母が異なる場合

擺劃（刮劃）、不從（不會）、白豁豁（白花花）、背肱拉子（背脊兒）、荸蘿（籤蘿・筐蘿）、嗤（出）、挖拉（吞兒兒）、乜乜蹺蹺（乜乜斜斜）、摸（木）、攏包（膿包）、死氣百辣（死氣百賴）、塌拉骨（禿拉骨）、佷農（伍農＝無能・窩囊）、無那（無奈）、仰百叉・仰拍叉（仰八叉）、支煞（扎煞・掙掙）

<6> 鼻韻母が異なる場合

肚喃（嘟嚕＝嘟嚕）、緊則・緊仔・緊子（竟自）、冷眼溜竄（冷眼溜冰）、儻得（烟過）、眷真（眷正）、頭信・投信（投性）、這們（這麼）、仔麼（怎麼）

<7> 字形が類似のみで、声母、韻母ともに異なる場合

揪採[jiū]（瞅睬）、砮碌（骨碌）、斫[zhuó]頭（砍頭）

以上、特徴のある語彙群として、<1>～<7>に分けて例を挙げた。

## 7.2. 「方言語彙の夥しい混入」

これは、三十年代の初め胡適「《醒世姻緣傳》考証」の中で「特殊土語」として山東省淄川地方の俗語を挙げている。以下に挙げる。カッコの中はその語の釈義を表す。

待中（快要）、中（好）、魔駝（迟延履行）、出上（拚得）、探業（安分）、流水（马上・一口气）、



## 《醒世姻縁傳》解題

頭信・投信・投性（爽性・索性）、善查・善荏（好对付的人）、老獾叻、扁・貶（偷藏・暗藏）、偏・偏（夸耀）、乍（狂）、照・朝（挡・招架）、長嗓黃（噤了喉咙）

### [注]

- 1) 1931年12月13日脱稿。
- 2) 胡適「《醒世姻縁傳》考証」では、作者を山東省出身の蒲松齡とする。しかし、反対する意見も続出し、作者は現在まだ不詳。
- 3) 西洋にも輪廻転生を唱える思想が存在している。例えば、19世紀に起こった神智学（theosophy）も、輪廻転生は、天地自然の力であり、人間の宿命だと主張。ブラヴァツキー夫人らにより神智協会（Theosophical Society）をニューヨークで1875年に設立。これは、人間に神秘的靈智があつて、これによって直接に神を見ると説く信仰、思想。輪廻転生は「宇宙の意思」、「神の意思」、「宇宙の法則」という。
- 4) 数字は、章回数、葉数（aは葉のオモテ、bは葉のウラ）、行数を示す。以下、例文は同じ。
- 5) 华夏出版社版の《醒世姻縁傳》の人物表を参照した。

### [参考文献]

- 香坂順一 1964, 「醒世姻縁の作者とことば」, 『明清文学言語研究会会報』第5号。
- 植田均 2001, 「《醒世姻縁傳》の言語特徴——同音仮借語——」, 奈良産業大学『産業と経済』第15巻5号, pp.1-34
- ハワード・マーフェット著, 田中恵美子訳 1981, 『H・P・ブラヴァツキー夫人——近代オカルティズムの母』, 竜王文庫。
- 楊春宇 2003 「《醒世姻縁傳》研究序説——关于版本、成书年代及作者问佳——」, 『北九州市立大学大学院紀要』第17号, pp.127-168
- 徐复岭 1993 「《醒世姻縁傳》作者和语言考论」, 齐鲁书社。
- 李焱 2006 「《醒世姻縁傳》及明清句法结构历时演变的定量研究」, 百花洲文艺出版社。